

満洲文字の文字表をめぐって(16)

—外国借音のローマ字翻字—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

吉池：前は5種の現代満洲語口語資料と『満漢字清文啓蒙』(1730年題)によって、過去の満文 c, j の音価を検討しました。『満漢字清文啓蒙』の、ca-, ce-, co-, cū-, cu-の c と ja-, je-, jo-, jū-, ju の j に付された漢字音注の、現代北京語音は全てそり舌音[tʂʰ, tʂ]です。しかし、過去の満文 c-, j-自体が、そり舌音[tʂʰ, tʂ]であったか、あるいは舌葉音[tʃʰ, tʃ]であったかについては、決定することはできません。

また満文 ci-の c と ji-の j に付された漢字音注の、現代北京語音は全て舌面音[tɕʰ, tɕ]です。しかし、過去の満文 ci-, ji-自体が、舌面音[tɕʰ, tɕ]であったか、あるいは舌葉音[tʃʰ, tʃ]であったか、ということについても、決定することはできません。

中村：しかし、満文 c, j に相当する現代満洲語口語は、狭い母音の前で舌面音[tɕʰ, tɕ] (もしくは舌葉音[tʃʰ, tʃ]) であり、それ以外の母音の前ではそり舌音[tʂʰ, tʂ]です。全ての現代満洲語口語がそり舌音[tʂʰ, tʂ]であるからには、よほどの論拠が無い限り、『満漢字清文啓蒙』にあっても、そり舌音[tʂʰ, tʂ]であったと想定して特段の不都合はないとしました。

吉池：満文 c, j の音価はそれで良いとして、問題は ci, ji です。

中村：『満漢字清文啓蒙』の満文 c, j に付された音訳漢字の[tʂʰ, tʂ]と[tɕʰ, tɕ]は、後続する母音の異なりによって補い合っています。したがって、一つの音韻/tʂʰ, tʂ/と理解することができます。

吉池：一つの音韻/tʂʰ, tʂ/であるとする、当時の満文 c, j の異音をどのように設定するか、ということが次に問題となります。そり舌音[tʂʰ, tʂ]と舌面音[tɕʰ, tɕ]とするか、それとも、そり舌音[tʂʰ, tʂ]と舌葉音[tʃʰ, tʃ]とするか。

中村：そり舌音、舌葉音、舌面音という微妙な音声について、過去の資料がどのようなであったか、その証拠を求めることは困難です。そこで、「これこれ」と想定したならば都合が良いというものにしましょう、ということになりました。

吉池：そり舌音[tʂʰ, tʂ]と舌面音[tɕʰ, tɕ]よりも、そり舌音[tʂʰ, tʂ]と舌葉音[tʃʰ, tʃ]

の方が音声の聴覚印象は近い。そこで、一つの音韻の異音としては、音声に近い[tʂʰ, tʂ]と[tʃʰ, tʃ]を想定したほうが自然であろうとしました。

中村：前々回に、満文の d, b, g, j に相当する現代満洲語音は“軟音”なので、過去の満洲語も軟音の無声音とすることにしました。音声表記はたとえば無声音[t]として軟音であると注記する方法と、無声化の記号「。」を付し[d̥]とし軟音であると注記する方法がありますが、我々は後者としました。この点を取り入れて破擦音の音声表記をすると、『満漢字清文啓蒙』の満文 c, j はそり舌音[tʂʰ, dʒ]とし、ci, ji は舌葉音[tʃʰ, dʒ]となります。

吉池：前回までの検討で、満洲文字の文字表に付す音価の検討は、いくつか課題を残しつつも、一応終了しました。最後に外国借音のローマ字翻字について、確認しておきましょう。

中村：これまでの議論においても何回か、外国借音のローマ字翻字を取り上げましたが、それを踏まえて、まとめておこうということですね。

#### 外国借音のローマ字翻字

吉池：メレンドルフ(1892)<sup>1</sup>の文字表の外国借音のローマ字は簡略なものであり、表の欄外に次のように並べられています。おもに中国語の音節を表記するためのものです。

*For transcribing Chinese syllables:—*

k' ㄐ, g' ㄍ, h' ㄏ, ts' ㄗ, ts ㄘ, dz ㄗ, ž ㄗ, sy (四) ㄙ, c'y (勅) ㄘ, jy (智) ㄐ

この漢語音用の字形とローマ字表記は、次のように整理することができます。いま漢字「此」は補足します。

・音節初頭（声母）の字形

k' [ㄐ] g' [ㄍ] h' [ㄏ] ts' [ㄗ] dz [ㄗ] ž [ㄗ]

・特殊な漢語音節の表記

(「此」) ts [ㄘ], 「四」 sy [ㄙ], 「勅」 c'y [ㄘ], 「智」 jy [ㄐ]

中村：この外国借音用に新たに作られた文字のうち、k' g' h' はこれで良いとして、それ以外の部分には様々な問題がありそうです。これを『満漢字清文啓蒙』(1730年題)第一字頭の、外国借音用の音節の部分に当てはめると、どのようでしょう。




<sup>1</sup> Möllendorff, Paul Georg von(1892) *A Manchu Grammar, with Analysed texts*, Shanghai. 民国 27 年 (1938) 北京で発行された増刷本による。














けで、なぜか、𐰃自体のローマ字表記は提示しません。まずは、有圈点満洲文字を作成する時点において、なぜ𐰃としたのかを検討しなければなりません。その点が解決するならば、自ずとローマ字表記も決まることでしょう。




### 「茲」の満文字形とローマ字表記

中村：図1を見ると、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）は、見出しを𐰃「茲」とし、その下に、用例として「夫子」の「子」挙げます。漢語の「茲」「吡」「四」の表記は次のようになります。先に確認したように満洲文字の字形に整合性がありません。

「茲」 [tsɿ] , 「吡」 [tsʰɿ] , 「四」 [sɿ] 

吉池：「茲」「吡」「四」のような漢字の音は、現代北京語では「茲」 [tsɿ]、「吡」 [tsʰɿ]、「四」 [sɿ] であり、母音は舌尖母音で日本語のズ、ツ、スのように聞こえます。そり舌音の「智」 [tʂɿ]「勅」 [tʂʰɿ]「世」 [ʂɿ]とも舌面音の「飢」 [tʂei]「七」 [tʂʰei]「西」 [tʂei]とも、母音の聴覚印象も調音位置もだいぶ異なります。この「茲」「吡」「四」は、漢語の中古音（隋唐代音）では [i] のような母音を持っていたが、近世音（宋元代音）では、ほぼ現代北京語のような音になっていたとされ、漢語を表記するための有圈点満洲文字を新たに作る時点（清・太宗の天聰6年[1632]）では、[i]母音ではなく現代北京語のような音であったはずで、満洲文字でこの漢語音をどのように表記するか問題になったことでしょう。このやや特殊な聴覚印象と調音位置の母音の表記のために新たに作成した母音字母が  なのでしょう。中村さん、たしか中村雅之(2008)<sup>4</sup>で、この母音の作成手順、およびに  という不整合な表記について述べ、「茲」  dzi、「吡」  tsë、「四」  së という翻字を提案しましたね。

中村：「茲」と同音の“子”や、“四”などは初期の満文資料（無圈点満洲文字資料）を見ると  se/a と表記されています。ダハイ（達海）が有圈点満洲文字を作る際に母音文字 e の中央右に1画加えて新たな文字  se を作り、それを基にして、さらに1画加えて問題の母音字母  を作ったと見ます。そこで、二点を付した母音  を  $\ddot{e}$  とするローマ字翻字案を提示し、「吡」  tsë、「四」  së としました。 $\check{e}/a \rightarrow (1 \text{ 点付加}) \check{e} \rightarrow (2 \text{ 点付加}) \ddot{e}$  というものです。

吉池：「吡」  tsë、「四」  së の   $\ddot{e}$  は、文字作成の手順、および字形自体を示唆していて、翻字としては優れていると思います。しかし、 $\ddot{e}$  というフォントをパソコン上で提示するためには余計にひと手間かけなければなりません。またこれまで使い慣れたメレンドルフの方式から大部離れます。実用という面から見て、従来の y を提案します。

<sup>4</sup> 中村雅之(2008)「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」『KOTONOHA』65、1-4頁。

ところで、「茲」の漢語音が初期の満文資料（無圈点満洲文字資料）で se/a と書かれているにもかかわらず、有圈点満洲文字で  $\text{ᡩᡠ}$  dzy とならず、 $\text{ᡩᡠ}$  となることをどのように理解するのでしょう。

中村：中村雅之(2008)では、 $\text{ᡩᡠ}$  の  $\text{ᡩ}$  を  $i$  の変形と見て dzi と翻字し、 $\text{ᡩᡠ}$  と、 $\text{ᡩᡠ} \cdot \text{ᡩᡠ}$  の字形が異なるのは、先ず初めに  $\text{ᡩᡠ}$  が作られ、次いで  $\text{ᡩᡠ}$  と  $\text{ᡩᡠ}$  が作られたため、整合性のない表記となったと想定しました。なお、この  $\text{ᡩᡠ}$  ですが、河内良弘(1996)は dzi とし満洲語文語で [dzü] と発音されたとします<sup>5</sup>。

他方、何の母音も付されていないとする説として、池上二郎(1947)<sup>6</sup>があります。たしか、吉池さんも同様の議論をしていましたね<sup>7</sup>。

吉池：まず池上二郎(1947)から確認しましょう。次のようにあります。

「満洲人が、ss ü, tz' ü, tz ü を写すそれらの字をつくつたとき、ss ü では [s] とつぎの母音（成音節的な有声子音か）の結合は満洲語の音節末や語末の [s] から聴き分けられ、あとのその音も聴きとることができて  $\text{ᡩ}$  の字で写し、また tz' ü では有気音のあとにあるので、その音も聴きとることができて  $\text{ᡩ}$  の字で写したが、tz ü では無気音のあとにあるその音が判別し難く全体を一つの子音とみて  $\text{ᡩ}$  の一字で写したといふことはないだらうか。」

(213-214 頁)。※引用文中の ss ü, tz' ü, tz ü は現代北京語の [s<sub>1</sub>] [ts<sup>h</sup><sub>1</sub>] [ts<sub>1</sub>] に相当する。

池上氏は、梶原昌八(1943)<sup>8</sup>を参照して議論を進めます。梶原昌八(1943)は [s<sub>1</sub>] [ts<sup>h</sup><sub>1</sub>] [ts<sub>1</sub>] の [ɿ] を成音節的な [z] と見ます<sup>9</sup>。上に引用した文は、漢語音 [s<sub>1</sub>] [ts<sup>h</sup><sub>1</sub>] と、無気音声母

<sup>5</sup> 「下の表の  $\text{ᡩᡠ}$  dzi は、満洲語文語で [dzü] (外来語) と発音された [清瀨]」(61 頁)。

<sup>6</sup> 池上二郎(1947)「満洲字 dz について」*Tōyōgo Kenkyū*, pp. 48-49. 『満洲語研究』213-215, 東京：汲古書院, 1999 年による。

<sup>7</sup> 吉池孝一(2018)「女真文字談義(6) — 『寧古塔紀略』の満洲語口語、無圈点及び有圈点満洲文字など—」『KOTONOHA』第 186 号(2018 年 5 月)、15-28 頁。

<sup>8</sup> 梶原昌八(1943)「北京語音聲學研究」『言語研究』12。

<sup>9</sup> (f)<sub>1</sub> 與<sub>1</sub>

“知, 吃, 失, 日”等字與“資, 疵, 私”等字之音節由如何單音構成呢? 由音節構成論說, 其各聲母是 tʂ(知), tʂh(吃), ʂ(失), z(日), ts(資), tsh(疵), s(私)。這點不成問題。然則其各韻腹(=“成音節的”音)是如何? 早已有有些人討論過此問題。Karlgren 在 *Étude sur la phonologie chinoise*, pp. 295-296 討論過, 將他的意見總括起來, 其韻腹都是一個舌尖母音, 即是知, 吃, 失, 日等之韻腹是 [ɿ], voyelle apico-alvéolaire, haute, tendue, délabialisée ou à l'ouverture labiale large, 而資, 疵, 私等之韻腹是 [ɿ], voyelle apico-gingivale, haute, tendue, délabialisée ou à l'ouverture labiale large. 但是有些人念 [ɿ] 做“成音節的” z, 念 [ɿ] 做“成音節的” z。高元(國音學 pp. 58-71)與汪怡(國語發音學 pp. 154-158)根據 H. Sweet 之說定為“聲化韻母”。惟高元以資, 疵, 私等之韻腹為 iŋ, 以知, 吃, 失, 日等之韻腹為 eŋ。反之汪怡將兩類都併合為 iŋ。趙元任在

の音節 [ts<sub>1</sub>] の母音 [ɿ] の聞こえ方を比べ、後者の方が小さかったため、後続する成音節的な [z] との区別が困難となり母音を付さなかったとし、ㄗ<sup>1</sup> を子音の単独字形とします。

中村：興味深い議論ではありますが、この結論は、私の聴覚印象とは異なります。[s<sub>1</sub>] [ts<sup>h</sup><sub>1</sub>] [ts<sub>1</sub>] の内、[ts<sub>1</sub>] の母音の聞こえが特段に小さいとは思えません。また、現代北京語に関するそのような報告も寡聞にして聞きません。

吉池：私の聞こえの印象も中村さんとほぼ同様です。[s<sub>1</sub>] [ts<sup>h</sup><sub>1</sub>] と [ts<sub>1</sub>] の間に、表記を変えるほどの差異があるようには聞こえず、池上二郎(1947)の議論は腑に落ちません。

中村：吉池さんの議論はどのようなものでしょう。

吉池：吉池孝一(2018)も池上二郎(1947)と同様に ㄗ<sup>1</sup> を子音のみを表記した形と見ますが理由は異なります。漢語の [ts<sub>1</sub>] を表す主要な文字「子」の大半が、母音の聞こえが小さい指小辞の“轻声”であった。その影響を受けて [ts<sub>1</sub>] については声母のみの表記としたというものです。アイデアを提示したもので用例の検討は不十分でした。そこで今回、『新満漢大詞典』<sup>10</sup> (メレンドルフとは異なるローマ字表記) を資料として漢語の [ts<sub>1</sub>] に相当する借用語を拾い出し整理しました。福田 1987『満洲語文語辞典』<sup>11</sup> および現代中国語の記述を参考として付します。

以下、単語の左端に、現代中国語辞典での声調の状況を付します。

- ・無印：轻声
- ・声調が有るもの：◎印
- ・不明なもの：？

なお [ts<sub>1</sub>] に相当する『新満漢大詞典』のローマ字と池上二郎(1955)のローマ字を対照させると次の通りです。

- ・『新満漢大詞典』 zy — 池上(1955) dz
- ・『新満漢大詞典』 ze — 池上(1955) dze

---

國語正音字典裏以知，吃，失，日等之韻腹爲ɿ，以資，疵，私等之韻腹爲z。以上各說都長短兼備。專據我觀察，知，吃，失，日等之韻腹是[z]，資，疵，私等之韻腹是[z]。若欲證明時，可將此等字念的長，前者必終於[z]音，後音必終於[z]音。足證管見不誤。從其發音方法看來，此等韻腹固然與子音[z]，[z]相同，可是就音聲的機能(fonction)說，不得不認稍有相異。原來子音是不能成音節的，而且韻腹是常成音節的。所以爲便利起見，將此等音編入母音論而且爲得是與子音做區別，暫時籍 Karlgren 的ɿ與ɿ來代表此等韻腹。但是 Karlgren 以z, z爲可能的念法，z, z兩音以外尚另認ɿ與ɿ兩母音存在。對於此點，我稍懷疑。按我所聽的，就是一個音，即沒有兩種念法。可是孰是孰非應該等俟後日詳細的統計調查。(67頁)

<sup>10</sup> 胡增益(1994)『新満漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。

<sup>11</sup> 福田昆之(1987)『満洲語文語辞典』横浜：FLL。

①語末の「子」が zy で表記される

1. abizy [名] 阿鼻, 又作阿鼻旨。
2. abizy na i gindana (宗) 阿鼻地獄。bizy は「鼻子」の音訳であろう。
3. bin zy [名] 檳子。リンゴに似た果物。
4. gioi zy [名] 桔子。ミカン。
5. giowanzy [名] 試卷。科挙の「卷子」答案用紙の音訳であろう。
6. guwanzy [名] (楽) 管子。
7. guzy [名] 扇骨子。せんすの骨。

◎8. huuwang taizy 皇太子。 【uu はメレンドルフの ū に相当する】

◎9. kungfuzy [名] 孔夫子。

◎10. kungzy [名] 孔子。

◎11. mengzy [名] 孟子。

12. menzy [名] 門子。

13. minzy [名] 見下: minzy buleku 振鏡, 護目鏡。福田 1987 [扞子] 髪ブラシ。

14. miyanzy [名] 緬甸。ミャンマー。他に、miyoozy 「苗子」(ミャオ族)、ooze 「倭子」(倭人)、hoise 「回子」(回教徒)とあることから見て、「緬子」の音訳であろう。

15. miyoozy [名] 苗族。「苗子」『中国語大辞典』<sup>12</sup>ミャオ族に対する蔑称。

16. niyan ggan zy [名] 粘竿子。トリモチで鳥を採る竿。

◎17. niyangzy [名] 娘子=niyangze, niyang ze。

18. niyanzy [名] ①捻子②油火紙=niyase。こより、燈心。

◎19. shizy [名] 世子。清代爵位名。

20. sozy [名] 梭子米。梭子は横糸を通す時に使用する器具。

◎21. taizy [名] 太子。

22. wanzy [名] 葉丸子。

◎23. zhangzy [名] 長子。第一子。

24. zhezy [名] 折子。折り目、ひだ、しわ。

【要検討】 zyda [名] 祇 (古指地神)。福田 1987 無し。祇に二音あり。群母は地の神、章母は敬う。

②語末の「子」が ze で表記される

1. chen ze [名] 橙子=chense, zenze, zense。古くは chénzi ダイダイ。

---

<sup>12</sup> 大東文化大学中国語大辞典編纂室(1994)『中国語大辞典』東京:角川書店。

2. giowanse [名] ①絹。② (一) 卷=giowanze。福田 1987 [卷子] 卷物。juànzi。
3. giowan ze efen [名] 卷子=giowanze, giowanse。一種面食 juǎnzi。
- ◎4. niyang ze [名] 娘子=niyangze, niyangzy。
5. booze [名] 包子=boose。
6. fangze [名] 方子=fangse。処方箋。
7. fei ze [名] 〈植〉榧子。カヤの実。
8. fenze [名] 份子。福田 1987 「分子」分け前。
9. ggan ze [名] 柑。福田 1987 「柑子」ポンカン。
- ◎10. gungze [名] 公子。
11. ooze [名] 〈旧〉倭子, 日本人=oze。『中国語大辞典』倭子 wōzi。
12. panze [名] 棋盤=panse。福田 1987 「盤子」将棋盤。
13. poze [名] 婆子。
- ◎14. shuze [名] 庶子。福田 1987 皇太子の家庭教師。
- ◎15. yang ze zhiyang [名] 〈地〉揚子江。

③語頭の「子」が ze で表記される

- ◎1. ze mu poo [名] 子母炮。火器。

④語末の「子」が se で表記される

1. bangse [名] 梆子。福田 1987 夜警の拍子木。
2. boose [名] 包子=booze, bouse。福田 1987 包み。
3. buse [名] 堡子。福田 1987 町、堡壘。
- ? 4. bingse [名] 天平。福田 1987 [平子] てんびん。
- ? 5. chaise [名] 釵, 簪子。福田 1987 [釵子] かんざし。
6. chese [名] ①册子。
- ? 7. chise [名] 畦子=chyse。うね。
8. chuse [名] 厨子。『中国語大辞典』chúzi 料理人。
9. chuse [名] 竹子。
10. chyse [名] 池子。
11. dangse [名] 档案, 档子, 册子。dangse は「档子」の音訳であろう。
12. dengse [名] 戥子。『中国語大辞典』dēngzi 竿ばかり。
13. dise [名] 文章底稿。福田 1987 [底子] 原稿。
14. fangse [名] 方子=fangze。処方箋。
15. fase [名] 木排, 筏子。fase は「筏子」いかだの音訳であろう。
16. fase [名] 方法。法子、てだての音訳であろう。
17. fengse [名] 盆子=fungse。



18. fiyoose [名] 瓢。福田 1987 [瓢子] ふくべなどで作ったひしゃく。
- ? 19. fubise [名] 〈植〉夫編子。
20. fungse [名] 粉, 粉子。
21. giowanse [名] ①絹。② (一) 卷=giowanze。福田 1987 [卷子] 卷物。juànzi。
22. giyase [名] 架子。福田 1987 「架子」棚、物置台
23. giyose efen [名] 餃子=giogiyān efen。福田 1987 giyose 「角子」肉まんじゅう。
24. guise [名] 臥柜。「柜子」戸棚、たんすの音訳であろう。
25. guse [名] 姑子, 尼姑, 比丘尼。
- ? 26. hangse [名] 面条兒。福田 1987 「行子」めん類。
27. hise [名] 戲子。福田 1987 俳優、訳者。
28. hiyese [名] 蝸子。福田 1987 さそり。
29. hoise [名] 回子。『中国語大辞典』 huízi 回教徒。
30. hose [名] 盒子。福田 1987 「盒子」蓋つきの小箱。
31. huuse [名] 胡子。福田 1987 ほおひげ。
32. huuwaise [名] 槐樹。福田 1987 「槐子」えんじゅの実。『中国語大辞典』 槐角 (子) huáijiǎo (zi)。
33. iose [名] 柚子。yòuzi ザボン・ブントンの木、実。
34. ise [名] 椅子。
35. kuwangse [名] 筐子。小さなかご。
36. lingse [名] 綾子。福田 1987 りんず。綸子、あや絹。
37. luse [名] 炉子。炉、かまど、こんろ。
38. maise [名] 小麦, 麦子。
39. mase [名] 麻子。あばた。
40. mengse [名] ①幔, 幔帳, 帳子②幔子。幔幕、とばり、カーテン。
41. niyase [名] 捻子=niyanzy。こより。
42. panse [名] 棋盤 (=panze。福田 1987 は「盤子」将棋盤とする)。
- ? 43. pingse [名] 天平。福田 1987 「秤子」はかり。
44. pingse [名] 瓶子。
45. puse [名] 鋪子, 商店。
46. puse [名] 補子。福田 1987 は「補子」徽章。
47. shanggiyan fangse 白幡。福田 1987 「幡子」のぼり、旗。
48. tangse [名] 堂子 (清代皇室祀神的) 地方)。
49. tengse [名] 藤子。福田 1987 むらさきしろふじ。
50. tingse [名] 亭子。福田 1987 亭、あずまや。
- ? 51. ubise [名] 〈植〉五倍子。福田 1987 〈漢方〉ヌルデ。
- ? 52. wase [名] 瓦 (瓦子の音訳であろう)。

53. wase [名] 袜子。くつした。

54. yangse [名] ①様子, 模様②文采。福田 1987 美、趣味、外観など。

55. zense [名] 橙子=zenze。福田 1987 ダイダイの実。

⑤語頭の紫が ze で表記される

◎1. ze ging moo [名] (植) 紫荊。

◎2. ze ing shi [名] 紫英石。

◎3. ze tan moo [名] 紫檀。

◎4. ze wei ilha [名] 紫薇花。

漢語の [tsɿ] という音節のうち「子」は 95、「紫」は 4 で、大半は「子」です。95 の「子」の内訳は、zy (池上 dz) 24、ze (池上 dze) 16、se (池上 se) 55 です。さらに、95 の「子」の内、現代漢語で軽声となるものは 74、非軽声は 13、不明は 8 です。

中村：用例のほとんどが、二音節語の二音節目に位置する指小字「子」ですね。

吉池：当時、指小字「子」が軽声で読まれたため、母音の聞こえが小さく子音のみと認識された。このような軽声の「子」の用法が敷衍され [tsɿ] は全て [ts] に相当する満文 dz で書かれることとなったとすると、漢語の [tsɿ] の満文の母音部分の表記が、[tsɿ] や [sɿ] の満文表記と異なることが、それほどの困難もなく理解できると考えます。

中村：当時において指小辞「子」が軽声であったかどうかは問題となりますね。過去の漢語に、現代方言の軽声に類似した現象が見られることを紹介した論文に遠藤光暁(1984)<sup>13</sup>があります。

吉池：遠藤光暁(1984)は、漢語にハングルの音注を付した『翻譯老乞大・朴通事』を資料としたものです。漢語文の中で、上声字+上声字であり、後ろの上声字が“虚”である場合、例えば、“果子”の“子”や“口里”の“里”などは変調して去声となります。あるいは二つの上声字が共に“兩字皆語助”の場合、たとえば“～了也”の“也”は変調して去声となります<sup>14</sup>。“果子”などは、現代北京語の3声+3声の姐姐が半3声+軽声の jiějie となる現象と類似しています。現代北京語の軽声の現象とは異なりますが、現代北京語の軽

<sup>13</sup> 遠藤光暁(1984)「『翻譯老乞大・朴通事』里的漢語声調」『語言学論叢』(北京大学中文系)13、162-182頁。

<sup>14</sup> 「翻譯老乞大朴通事凡例」の「一旁點」の記述の最後に「若下字爲虚或兩字皆語助則下字呼爲去聲」と有ります。これは、上声字+上声字で、下の上声字が“虚”である場合、あるいは上声字+上声字で二字共に“語助”の場合、下の上声字が去声になるとの記述です。これは本文中の用例と一致します。“虚”は指小辞「子」をも含みます。

声成立への動きが、『翻訳老乞大・朴通事』の当時に始まっていたことを推測することができます。

中村：『翻訳老乞大・朴通事』の成書年は不明ですが、その凡例が、『四声通解』（正徳12年[1517]序）に転載されているので、少なくとも1517年以前の書物であることは確かです。有圈点満洲字は、1632年に作成されたとされるので、ほぼ百年後の1632年の時点で、指小辞の「字」が軽声と成っていても不思議はありません。

吉池：軽声説にとって不都合な点が出るまでは、漢語の指小辞「子」の軽声の影響で、満洲文字  $\text{ᡩᠠ}$  は子音のみで表記されたと見ておきたいと思います。

### 「茲」「吡」「四」「吃」「智」のローマ字表記

中村：最後に図1の四 sy、吃 c'y、智 jy をめぐる表記の不整合について検討しましょう。



「茲」「吡」「四」「吃」「智」をメレンドルフのローマ字の内、「吡」に対する ts は ts'y に変更し、ローマ字表記が無い「茲」（主に「子」）は dz を用い、それ以外はメレンドルフによると次のようになります。「吃」「智」の音節が問題になります。






「茲」 [tsɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	dz
「吡」 [tsʰɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	ts'y
「四」 [sɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	sy
「吃」 [tʂʰɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	c'y
「智」 [tʂɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	jy





吉池：「吃」 [tʂʰɿ] と「智」 [tʂɿ] の満洲文字の母音は i です。 $\text{ᡩᠠ}$  ci、 $\text{ᡩᠠ}$  ji は舌葉音（もしくは舌面音）となるから、それとの区別を付けそり舌音の [tʂʰɿ]、[tʂɿ] であることを明示するため、「◦」を付して  $\text{ᡩᠠ}$ 、 $\text{ᡩᠠ}$  としたと想定します。仮に母音  $\text{ᡩᠠ}$  を利用したことを汲み取り、さらに「◦」を「'」で表記することになると、 $\text{ᡩᠠ}$  を c'i とし、 $\text{ᡩᠠ}$  を j'i とするのが自然です。

「茲」 [tsɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	dz
「吡」 [tsʰɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	ts'y
「四」 [sɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	sy
「吃」 [tʂʰɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	c'i
「智」 [tʂɿ]	$\text{ᡩᠠ}$	j'i

中村：理屈の上では  $\text{ᡩᠠ}$  c'i、 $\text{ᡩᠠ}$  j'i で問題は無いのでしょうか。しかし、その場合、メレンドル

フの翻字案を大幅に変更することになり、視認性においても舌面音と紛らわしくなります。実用面を考慮すると、c'y→cy とする最小限の訂正を加えて、cy、jy とするのがいいのではないのでしょうか。






















「茲」 [tsɿ]		dz
「吡」 [tsʰɿ]		ts'y
「四」 [sɿ]		sy
「吃」 [tʂʰɿ]		cy
「智」 [tʂɿ]		jy

吉池：ただし、「吃」 [tʂʰɿ] と「智」 [tʂɿ] を、母音 e に二点を付した母音  y を利用して、、 とはせず、母音  i を利用して新たに文字を作ったのはなぜか、今後の検討課題として残ります。

中村：以上で外国借音の表記の検討は終了ということですね。これまで16回にわたり、有圈点満洲文字の文字表に関わる諸問題を検討してきました。最後にこれまでの議論を反映した修正版の文字表を提示してこの対談を締めくくりましょう。

## 満洲文字文字表（修正版）

### 母音

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
a[a]			 b, p, k, g, hの下 	
e[ə]		 t, d, k, g, hの下 	 t, dの下  b, pの下  * k, g, hの下 	
i[i]		子音の下  母音の下  母音の下  *	 b, p, k, g, hの下 	 *  名詞語尾

※iの中間字形の「母音の下」には両形があるが、これは文献による異なりであるという。単独字形に「名詞語尾」と付記したものは、名詞語尾 i が語幹から離されて書かれた場合の字形である。

o[o]			単音節末尾 b, p, k, g, hの下		
			多音節末尾 母音の下		
u[u]			単音節末尾 b, pの下		
		t, d, k, g, hの下	多音節末尾		
			t, dの下で単音節末尾 k, g, hの下		
			t, dの下で多音節末尾		

※oの末尾の注記「単音節末尾 b, p, k, g, hの下」は「単字の末尾で。ただし b, p, k, g, hの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。uの末尾の注記「t, dの下で単音節末尾 k, g, hの下」は「t, dの下で且単字の末尾における特別の字形。なほまた k, g, hの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。両者は注記の表現が異なる。他もこれに準じる。

ū[u]				
------	--	--	--	--

子音

翻字と発音 初頭の字形 中間の字形 末尾の字形 単独の字形

n[n]		母音の上 子音の上	( *稀)
<2種の k, g, h>			
k[qʰ]	a, o, ūの上	a, o, ūの上 子音の上	
g[ɸ]	a, o, ūの上	a, o, ūの上	
h[h]	a, o, ūの上	a, o, ūの上	
k[kʰ]	e, i, uの上	e, i, uと子音の上 ( *稀 子音の上)	( *稀)
g[ɸ]	e, i, uの上	*e, i, uの上	
h[x]	e, i, uの上	*e, i, uの上	

b[b]	ㅃ	ㅅ	ㅆ
p[p <sup>h</sup> ]	ㅍ	ㅍ	
s[s]	ㅅ	ㅅ	ㅆ ㅅ
š[š]	ㅅ	ㅅ	(ㅆ 稀)

<2種の t, d>

t[t <sup>h</sup> ]	ㅌ a, i, o の上	ㅌ a, i, o の上	ㅊ
	ㅍ e, u, ū の上	ㅌ e, u, ū の上	
		ㅍ 子音の上	
d[d̥]	ㅌ a, i, o の上	ㅌ* a, i, o の上	
	ㅍ e, u, ū の上	ㅌ e, u, ū の上	
l[l]	ㄹ	ㄹ	ㄹ
m[m]	ㅁ	ㅁ	ㅁ
c[tʃ <sup>h</sup> , tʃ <sup>h</sup> ]	ㅈ	ㅈ	
j[ɕʒ, ɕʒ]	ㅉ	ㅈ	
y[j]	ㅊ	ㅊ*	
r[r]	ㄹ	ㄹ	ㄹ

<2種の f. i, o, u, ū の上の f = a, e の上の w>

f[f]	ㅍ a, e の上	ㅍ a, e の上	
f[f]	ㅍ i, o, u, ū の上	ㅍ i, o, u, ū の上	
w[v]	ㅍ a, e の上	ㅍ a, e の上	
-ng		ㄱ 子音の上	ㄱ

## 外国借音

### 子音

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
k' [k <sup>h</sup> ]	ㄎ a, o の上	ㄎ a, o の上		
g' [g <sup>o</sup> ]	ㄎ a, o の上	ㄎ a, o の上		
h' [x]	ㄎ a, o の上	ㄎ a, o の上		
ts' [ts <sup>h</sup> ]	ㄎ	ㄎ		
dz [dʒ]	ㄎ	ㄎ	ㄎ *	ㄎ *
z [z]	ㄎ			

### 母音

[ü]	s, ts'の下	ㄎ	s, ts'の下	ㄎ
-----	----------	---	----------	---

### 特殊音節

「茲」 [tsɿ]	ㄎ	dz
「吡」 [ts <sup>h</sup> ɿ]	ㄎ	ts'y
「四」 [sɿ]	ㄎ	sy
「吃」 [tɕ <sup>h</sup> ɿ]	ㄎ	cy
「智」 [tɕ <sup>l</sup> ɿ]	ㄎ	jy

### 特殊字形

bo, bu, bū, ku, k'o など、子音と母音を組み合わせた字形は、母音が子音の中に組み込まれた特殊な字形となる。po, pū, hu, gu, h'o, g'o もこれに準ずる。

翻字	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形
bo	𑄢	𑄣	𑄤
bu	𑄢̣	𑄣̣	𑄤̣
bū	𑄢̄	𑄣̄	𑄤̄*
po	𑄣	𑄤	𑄥
ku	𑄣̣	𑄤̣	𑄥̣
k'o	𑄣̣̄	𑄤̣̄	𑄥̣̄